



U B E 株式会社

2022 年度第 2 四半期決算説明会

2022 年 11 月 4 日

イベント概要

[企業名]	U B E 株式会社
[企業 ID]	4208
[イベント言語]	JPN
[イベント種類]	決算説明会
[イベント名]	2022 年度第 2 四半期決算説明会
[決算期]	2022 年度 第 2 四半期
[日程]	2022 年 11 月 4 日
[ページ数]	29
[時間]	18:00 – 18:58 (合計：58 分、登壇：35 分、質疑応答：23 分)
[開催場所]	電話会議
[登壇者]	1 名 取締役 常務執行役員 CFO 藤井 正幸 (以下、藤井)

登壇

司会：投資家の皆様、こんばんは。本日はお忙しい中、UBE 株式会社の電話会議にご参加いただきましてありがとうございます。これより、取締役常務執行役員 CFO、藤井正幸より、2022 年度第 2 四半期連結決算について、約 30 分間ご説明申し上げたあと、質疑応答を行います。会議全体の時間は 60 分を予定しております。

電話会議を始めます前に、皆様におことわり申し上げます。これから行う説明におきまして、現時点の予想に基づく将来の見通しを述べる場合がございますが、それらは全てリスクならびに不確実性を伴っています。実際の結果が見通しと異なる場合があることをあらかじめご了承ください。

それでは、決算説明を開始いたします。藤井常務、よろしくお願いいたします。

藤井：はい。皆さん、こんばんは。UBE の藤井でございます。本日はお忙しいところご参加いただきましてありがとうございます。

では、早速ですけれども、本日発表いたしました 2022 年度第 2 四半期連結決算、それから、通期業績予想につきまして、資料に沿ってご説明をいたします。よろしくお願いいたします。

2022年度 第2四半期決算概要

UBE / UBE株式会社

連結対象会社

項目	2021年度末 (A)	2022年度 第2四半期末 (B)	増減 (B) - (A)	摘要
連結 子会社数	65社	36社	△29社	<ul style="list-style-type: none"> - 明和化成株式会社 - 有限会社アールコム - 宇部建設資材販売株式会社 - 宇部興産建材株式会社 - 宇部興産セメントサービス株式会社 - 宇部マテリアルズ株式会社 - 小澤商事株式会社 - 関東宇部コンクリート工業株式会社 - 関東生コン輸送株式会社 - サンヨー宇部株式会社 - 大協企業株式会社 - 株式会社ニシハリマ宇部 - 萩森物流株式会社 - 株式会社富士宇部 - 北海道宇部運送株式会社 - 宇部興産開発株式会社 - 一関レミコン株式会社 - 宇部興産海運株式会社 - 宇部興産コンサルタント株式会社 - 宇部サンド工業株式会社 - 株式会社大分宇部 - 株式会社関西宇部 - 株式会社関東宇部ホールディングス - 三信通商株式会社 - 新興運輸倉庫株式会社 - 千葉宇部コンクリート工業株式会社 - 萩森興産株式会社 - 株式会社平泉 - 株式会社北海道宇部
持分法 適用会社数	26社	15社	△11社	<ul style="list-style-type: none"> - 宇部三菱セメント株式会社 - 鹿野宇部コンクリート工業株式会社 - 株式会社釧路宇部 - 別海宇部コンクリート工業株式会社 - やまよ商事株式会社 - 千葉リバーメント株式会社 - 北九州宇部コンクリート工業株式会社 - 中四国宇部コンクリート工業株式会社 - 北陸宇部コンクリート工業株式会社 - UBE Singapore Pte., Ltd. - 山口エコテック株式会社
計	91社	51社	△40社	

3

お手元の資料、右下にページ番号が振ってございますけれども、まず 3 ページのスライドです。

連結対象会社ですけれども、会社数 29 社減って、連結子会社 36 社になっております。内訳は右の摘要欄にお示ししておりますけれども、一番上の明和化成は 4 月 1 日付けで当社に統合いたしました。それから、その右側の宇部興産開発は生産終了に伴いまして連結から外れたものです。

それ以降の会社、27 社ございますけれども、これらは全て旧建設資材セグメントの関係でございます。4 月 1 日付けで UBE 三菱セメントに移管したものでございます。

続いて、持分法適用会社でございますけれども、こちらも 11 社減少しまして、15 社となっております。具体的な会社名を右に記載しておりますが、これら 11 社は全て同じく UBE 三菱セメントに移管したということでございます。ということで、対象会社数は 91 社から 51 社へと、大きく減少しております。

環境要因

項目			2021年度 第2四半期 (A)	2022年度 第2四半期 (B)	差異 (B) - (A)	
為替レート			円/\$	109.8	134.0	24.2
資材 価格	ナ フ サ	CIF	\$/ t	638	889	251
		国産	円/KL	50,600	83,500	32,900
	ベンゼン (ACP)		\$/ t	981	1,171	190
	豪州炭 (CIF)		\$/ t	143.5	406.5	263.0
			円/t	15,756	54,459	38,703

4

4 ページのスライド、環境要因でございます。

為替レート 134 円で、ご案内のとおり円安で対前年同期推移しております。ナフサ、ベンゼン、石炭価格、それぞれここにお示ししているとおりでございますけれども、前年同期に比べると大きく価格が上昇したところで推移をしていったところでございます。

主要項目

(単位：億円)

項目	2021年度 第2四半期 (A)	2022年度 第2四半期 (B)	差異 (B) - (A)	増減率
売上高	3,067	2,448	△ 619	△ 20.2%
営業利益	191	85	△ 106	△ 55.4%
経常利益	179	△ 18	△ 197	—
親会社株主に帰属する 四半期純利益	95	△ 3	△ 99	—

5

5 ページのスライド、主要項目になります。

売上高は、終わった上半期 2,448 億円で、前年同期に比べると 619 億円の減少減収で、率にしますと 20.2%になります。営業利益は、実績値 85 億円、前年同期比では 106 億円の減益、率にして 55.4%の減益です。経常利益は、18 億円の赤字になっており、前年同期比では 197 億円と大きく減益です。親会社株主に帰属する四半期純利益ですが、3 億円の赤字で、同じく 99 億円という大幅な減益となっております。

先ほど、連結対象会社のところで申しましたけれども、4月1日付でセメント関連事業を分離、移管しております。このため、これらが連結の売上高、営業利益から外れております。

売上高につきましては、原料部門で原燃料価格の高騰に伴う価格是正や円安効果といったものはありますけれども、やはりセメント関連事業が外れた影響が大きく、先ほどご覧いただいたような減収になっております。

営業利益に関しましては、セメント関連の変動に加えまして、隔年でアンモニア工場の定修に伴う数量減ですとか、原料価格の高騰によるスプレッドの悪化といったこともありまして、主としてベーシック事業を中心に減益になっております。

また、営業外損益ですけれども、持分法投資損益で取り込みますセメントの統合新社の業績が資源価格の高騰等で大幅に悪化しております。これを取り込んだ影響で、経常減益幅が大きく拡大しているのは先ほどご覧いただいた通りでございます。

一方で、セメント関連事業の移管に際しまして、一過性のもものではございますけれども、持分変動利益が特別利益として計上されておりますので、ここでも大きく数値が動いているといった状況になっているところでございます。

セグメント別 売上高/営業利益

(単位：億円)

	セグメント*	2021年度 第2四半期 (A)	2022年度 第2四半期 (B)	差異 (B) - (A)	増減率
売上高	機能品	290	318	27	9.4%
	樹脂・化成品	1,194	1,495	301	25.2%
	機械	454	453	△1	△0.2%
	その他	244	334	90	36.7%
	調整額	885	△151	△1,036	-
	計	3,067	2,448	△619	△20.2%
営業利益	機能品	52	55	3	6.8%
	樹脂・化成品	96	24	△71	△74.8%
	機械	24	12	△11	△48.4%
	その他	12	12	1	6.0%
	調整額	8	△18	△27	-
	計	191	85	△106	△55.4%

*：2022年度より、セメント関連事業の持分法適用関連会社化に伴い、「化学」「建設資材」「機械」「その他」から「機能品」「樹脂・化成品」「機械」「その他」の4区分とし、「医薬」は「その他」に含めています。それに伴い2021年度第2四半期実績についても比較のため新しいセグメント区分に組み替えており、「建設資材」は「調整額」に含めています。

6

続いて、6ページのスライド。セグメント別の売上高、営業利益でございます。

今期からセグメントを変更しております。表の下のところに米印で注釈がございますけれども、新しいセグメントとしては機能品、樹脂・化成品、機械、その他と四つのセグメント分けにしております。前年同期の数値につきましても、この同じセグメントに組み替えた上で、比較の表示にしております。

セグメントをご覧いただきますと、一番上の機能品は増収増益になっております。主力製品が堅調に推移しておりますので、売上高は27億円の増収、営業利益は3億円の増益になっております。

その次の樹脂・化成品は、従来のナイロン・ファインや合成ゴムといったところが主体になっているセグメントです。価格転嫁等を進めておりますので、売上高としましては301億円の増収になっておりますけれども、営業利益は71億円の大幅な減益になっております。

それから、機械ですが、売上高はほぼ前年同期比並みになっておりますけれども、営業利益は11億円の減益という状況です。

その他でございますけれども、このセグメントは医薬事業ですとか、自家発の電力等が入っております。売上高は90億円の増収、営業利益はほぼ前年同期並みといったところです。

それから、調整額のところですが、売上は 1,036 億円と大きな減収というかたちになっていますし、営業利益は 27 億円の減益になっておりますけれども、これらのほとんどはセメント関連事業が移管して連結から外れた部分の影響でございます。

差異分析 全社

(単位：億円)



7

続いて、7 ページのスライド、売上高、営業利益とセグメントの内訳です。

これについては先ほど、前のページでご覧いただいたとおりでございます。定性情報といたしまして、売上高の減収は、最初に申しましたように、セメント関連事業の移管に伴うものやら、樹脂・化成品で原料市況の上昇と販売価格、価格転嫁を進めたといったところです。

営業利益について、機能品につきましては、全般的に販売堅調でプラスになっておりますけれども、樹脂・化成品は、原料価格の上昇やアンモニア工場の定修影響といったところが主要因になっています。

価格差、数量差等の内訳について、全社としてはご覧いただいているとおりですが、価格差として 33 億円の減益要因、数量差では 19 億円の減益要因、固定費ほかで 54 億円の減益要因という内訳になっております。

差異分析 機能品

(単位：億円)



8

ここからセグメント別のご説明です。まず、8 ページのスライドが機能品セグメントになります。

売上高は 27 億円増収です。主要な製品で申しますと、ポリミドはディスプレイ向けの COF フィルム、有機 EL パネル向けのワニス等の販売が堅調に推移しております。

分離膜ですけれども、バイオガス関連の用途を中心に需要が非常に旺盛になって、好調に推移しております。それから、セラミックスは軸受、基板用途等の需要が好調に推移しています。これら主要な製品が順調に推移をしてきたというところです。

営業利益は増益ではありますが、セパレータにつきましては、自動車減産の影響を受けて減益になっております。ただ、分離膜やセラミックスといったところの販売好調に伴いまして、トータルすると増益になったといったところです。

価格差は 4 億円の減益要因、数量差は 10 億円の増益要因、固定費ほかで 3 億円の減益要因という内訳になっております。

ラクタムといったところは、数量差でマイナス要因が出ております。それから、固定費で7億円の減益要因ということで、合わせて71億円の減益になっております。

差異分析 機械

(単位：億円)



10

続いて、10 ページのスライド。機械セグメントになります。

売上高はほぼ前年同期並み、1億円の減収です。

営業利益は11億円の減益となっております。要因としましては、売上高は成形機と製鋼はプラス要因で、成形機は自動車産業向け受注回復ということで販売は増えております。製鋼も、原料価格上昇に伴いまして製品価格も上昇しているという価格要因があります。

これらプラス要因はございますけれども、産機では電力会社向け運搬機等大型案件が一巡したということで、売上が減っております。この影響のほうが大きかったことで、若干の減収になっているというところなんです。

営業利益でございまして、産機の減収に伴う利益が減少しています。製鋼については、売上は上がっておりますけれども、エネルギーコスト、特に電力コストが上昇しておることがございまして、全体通して見ますと減益になっているというところなんです。

価格差の4億円のマイナスや数量差の1億円の減益は、製鋼事業に関わるものでございます。固定費ほかのマイナス6億円の中に、機械部門の限界利益のマイナス4億円が含まれています。

営業利益～四半期純利益

(単位：億円)

項目	2021年度 第2四半期 (A)	2022年度 第2四半期 (B)	差異 (B) - (A)
営業利益	191	85	△ 106
営業外損益	△ 12	△ 103	△ 92
金融収支	3	8	6
持分法投資損益	△ 7	△ 111	△ 104
うちUBE三菱セメント株に係る持分法投資損益		△ 118	
為替差損益	4	16	11
その他	△ 12	△ 16	△ 4
経常利益	179	△ 18	△ 197
特別損益	△ 19	66	85
税金等調整前四半期純利益	160	48	△ 112
法人税等・非支配株主利益	△ 65	△ 52	13
親会社株主に帰属する四半期純利益	95	△ 3	△ 99
1株当たり四半期純利益	95.89円	△ 3.52円	△ 99.41円

12

続きまして、12ページのスライド。営業利益以降の内訳になっております。

営業利益は、先ほどご覧いただきましたように85億円という実績で、106億円の減益と申しました。営業外損益ですけれども、実績値でマイナスの103億円で、前年同期に比べますと92億円ほど悪化をしております。中でも大きいのが持分法投資損益で、実績値マイナス111億円と大きくマイナスになっております。

内訳としまして、UBE三菱セメントに係る持分法投資損益と記載しておりますけれども、このUBE三菱セメントの関連で取り込んだ持分法投資損益がマイナスの118億円ほどございます。これが大きく影響したところです。

それら差し引きまして、経常利益は最初にご覧いただきましたようにマイナスの18億円です。特別損益は、実績値が66億円で、前年同期に比べると85億円ほど改善をしているのですが、セメント関連事業の分離移管に伴いまして、会計上持分変動利益が計上されたという、一過性のプラス要因がございます。

それら差し引きしまして、親会社株主に帰属する四半期純利益が3億円の赤字に着地したというところでございます。

貸借対照表

(単位：億円)

項目		2021年度末 (A)	2022年度 第2四半期末 (B)	差異 (B) - (A)
資産	流動資産	3,947	2,712	△ 1,235
	固定資産	4,431	4,599	168
	合計	8,380	7,312	△ 1,068
負債	有利子負債	2,418	1,893	△ 525
	その他負債	2,021	1,407	△ 614
		4,439	3,300	△ 1,139
純資産	自己資本*	3,691	3,772	81
	非支配株主持分他	249	239	△ 10
	計	3,940	4,012	71
負債・純資産合計		8,380	7,312	△ 1,068

*「自己資本」…純資産から新株予約権と非支配株主持分を除外したものと

13

続いて、13 ページのスライドです。バランスシートの項目になります。

こちらセメント関連事業の分離移管に伴いまして、資産・負債を移管しておりますので、それぞれ減少しております。

資産ですが、総資産は9月末時点で7,312億円です。前年度末、3月末と比較しまして1,068億円ほど減少しております。このうち、建設資材の影響が1,290億円の減少要因になっているといったところです。

それから、負債の中の有利子負債ですが、上期末残高1,893億円と、3月末に比べまして525億円ほど減少しております。こちら有利子負債を建設資材に移管しておりますので、この影響がマイナスの433億円ほど含まれているというところでございます。

それから、自己資本ですが、残高3,772億円と、3月末に比べると81億円程増加しております。先ほどご覧いただきましたように、四半期純利益は3億円の赤字でございましたし、その前年度の期末配当の配当支払い等も行っておりますけれども、一方で、円安になっておりまして、為替換算調整勘定のプラスが大きく働いておりまして、差し引きするとトータルで81億円ほど上回ったというところでございます。

キャッシュ・フロー計算書

(単位：億円)

項目	2021年度 第2四半期	2022年度 第2四半期	
A.営業活動によるCF	127	113	税金等調整前四半期純利益 48 減価償却費 125 持分法による投資損失 111 持分変動益 △83 運転資金の増減 △55 法人税等の支払 △57 他
B.投資活動によるCF	△ 200	△ 57	短期貸付金の増減 83 有形・無形固定資産の取得 △116 関係会社出資金の払込 △25 他
フリー・キャッシュ・フロー (A+B)	△ 73	56	
C.財務活動によるCF	△ 234	△ 149	有利子負債の増減 △91 配当金の支払 △58 他
D.現金及び現金同等物の増減 (含、換算差額等)	△ 309	△ 512	会社分割に伴う減少 △433 他
E.現金及び現金同等物の四半期末残高	488	275	

14

続いて、14 ページのスライドがキャッシュ・フローになります。

営業活動によるキャッシュ・フローは、実績値が 113 億円です。投資活動によるキャッシュ・フローは 57 億円のキャッシュ・アウトです。差し引きしまして、フリー・キャッシュ・フローがプラス 56 億円になっております。

投資活動によるキャッシュ・フローが小さくなっていますけれども、右の内訳に記載しています、短期貸付金の増減ということで、83 億円のキャッシュ・インのプラスがございました。これは、建設資材のグループ会社に貸し付けておりました貸付金を分離、統合に際しまして回収をしていますが、これが投資活動によるキャッシュ・フローの中にカウントされていますので、こういった数値になっています。これを差し引いたところで見ますと、通常どおりの投資活動、キャッシュ・アウトになっているというところでございます。

それから、財務活動によるキャッシュ・フローでございます。有利子負債の削減や配当金の支払いで、149 億円のキャッシュ・アウトです。

期末の現金および現金同等物は、一番下でございますけれども、275 億円という残額になってございます。

以上が第 2 四半期の決算の概要でございます。

連結対象会社

項目	2021年度末 (A)	2022年度末 (B)	増減 (B) - (A)	摘要
連結 子会社数	65社	36社	△29社	<ul style="list-style-type: none"> + 株式会社エーピーアイコーポレーション - 明和化成株式会社 - UBE Advanced Materials INC. - 有限会社アールコマ - 宇部建設資材販売株式会社 - 宇部興産建材株式会社 - 宇部興産セメントサービス株式会社 - 宇部マテリアルズ株式会社 - 小澤商事株式会社 - 関東宇部コンクリート工業株式会社 - 関東生コン輸送株式会社 - サンヨー宇部株式会社 - 大協企業株式会社 - 株式会社ニシハマ宇部 - 萩森物流株式会社 - 株式会社富士宇部 - 北海道宇部運送株式会社 + MAPIC Europe NV - 宇部興産開発株式会社 - Advanced Electrolyte Technologies LLC - 一関レミコン株式会社 - 宇部興産海運株式会社 - 宇部興産コンサルtant株式会社 - 宇部サンド工業株式会社 - 株式会社大分宇部 - 株式会社関西宇部 - 株式会社関東宇部ホールディングス - 三信通商株式会社 - 新興運輸倉庫株式会社 - 千葉宇部コンクリート工業株式会社 - 萩森興産株式会社 - 株式会社平泉 - 株式会社北海道宇部
持分法 適用会社数	26社	15社	△11社	<ul style="list-style-type: none"> - 宇部三菱セメント株式会社 - 鹿野宇部コンクリート工業株式会社 - 株式会社釧路宇部 - 別海宇部コンクリート工業株式会社 - やまよ商事株式会社 - 千葉リバーメント株式会社 - 北九州宇部コンクリート工業株式会社 - 中四国宇部コンクリート工業株式会社 - 北陸宇部コンクリート工業株式会社 - UBE Singapore Pte., Ltd. - 山口エコテック株式会社
計	91社	51社	△40社	

16

続きまして、今年度通期の連結業績予想に関しましてご説明をいたします。16 ページのスライドです。

ほとんど先ほどの第2四半期末までに出てきておりましたけれども、連結子会社数について、新たに一番上、エーピーアイコーポレーションと MAPIC Europe という2社が連結子会社として加わる予定になっております。これは12月1日付で譲渡を受けることになっておりますので、本下期中に連結対象会社になってくる予定でございます。

そのほかの会社につきましては、上から3行目、UBE Advanced Materials INC.、それから、その右側の Advanced Electrolyte Technologies LLC の2社について、これらはもともとアメリカで電解液の投資目的会社として設立したのですが、こちらも清算が終了する予定ですので、連結から外れる予定でございます。それ以降の会社は、最初にご説明しましたように、セメント関係ということで移管した会社でございます。

持分法適用会社に関しましても、これは第2四半期の異動と同様で、下期の予定は今のところ入っておりません。なお、連結子会社で入ってきますエーピーアイコーポレーションと MAPIC Europe につきましては、実際の譲渡予定日が12月1日の予定になっておりますので、連結子会社として入ってくる予定とカウントしておりますけれども、業績等の数値の面ではこれらは含まれていないというところでございます。

環境要因

項目			2021年度 (A)	2022年度 (B)	差異 (B) - (A)	
為替レート		円/\$	112.4	137.0 [140.0]	24.6	
資 材 価 格	ナ フ サ	CIF	\$/ t	702	905 [920]	203
		国産	円/KL	56,700	84,300 [85,100]	27,600
	ベンゼン (ACP)		\$/ t	990	1,185 [1,200]	195
	豪州炭 (CIF)		\$/ t	170.3	406.0 [405.0]	235.7
円/t			19,133	55,618 [56,700]	36,485	

[]は2022年度下期のみの数値

17

17 ページ、環境要因でございます。22 年度は 2 段書きにしておりますけれども、下の括弧がついているところがこの下期の想定でございます。

為替レートを 140 円と置いております。それから、ナフサは CIF ですが、920 ドル、国産で 8 万 5,100 円。ベンゼンにつきましては 1,200 ドル。それから、石炭は 405 ドルという前提で置いております。

基本的な考え方は、この第 2 四半期までのところで高騰しているものは高値継続という前提で想定をしております。実際に今、足元の価格は、ここよりももう少し落ち着いた状況にはなっていると理解をしておるところでございます。

主要項目

(単位：億円)

項目	2021年度 (A)	2022年度 (B)	差異 (B) - (A)	増減率
売上高	6,553	5,470	△ 1,083	△ 16.5%
営業利益	440	290	△ 150	△ 34.1%
経常利益	415	45	△ 370	△ 89.2%
親会社株主に帰属する当期純利益	245	20	△ 225	△ 91.8%

項目	2021年度末 (A)	2022年度末 (B)	差異 (B) - (A)
総資産	8,380	7,400	△ 980
有利子負債	2,418	2,100	△ 318
自己資本 *1	3,691	3,750	59
年間配当金 (円/株)	*2 95.00	*3 100.00	5.00

*1: 「自己資本」…純資産から新株予約権と非支配株主持分を除外したもの

*2: 95.00円 (中間配当金45.00円、期末配当金50.00円)

*3: 100.00円 (中間配当金50.00円、期末配当金50.00円)

18

18 ページのスライド、主要項目についてです。

10月28日に、業績修正ということで、主要なところは発表いたしておりますけれども、上期の推移や足元の状況等を踏まえまして、下期を見直して通期業績を見直したところでございます。

通期の数字でございましてけれども、売上高は5,470億円と、前回の業績予想に比べまして100億円ほど下方修正をいたしました。営業利益ですけれども、290億円という見通しで、同じく前回から30億円下方修正をしております。

経常利益は、予想値45億円で、前回予想から125億円と大きく下方修正をいたしました。親会社株主に帰属する当期純利益が20億円で、こちらも前回の予想から130億円大きく下方修正をしたという、そういった修正見直しを出したところでございます。

それから、バランスシートの項目です。総資産7,400億円は、前回想定と特に変わっておりません。有利子負債のところは2,100億円、若干300億円ほど増えそうというところでございます。自己資本は3,750億円と、前回から多少下回るかなという見直しを立てているところでございます。

年間の配当金ですけれども、1株あたり100円配当です。これは従来からの配当予想を据え置かせていただいております。業績はだいぶ今期、厳しい想定になっておりますけれども、今期のこの業績の要因ですとか、財務の状況等を総合的に判断しまして、配当予想は据え置いたというところでございます。

下に注書きがございますように、中間配当で1株50円、期末配当で50円という内訳を想定しております。中間配当の1株あたり50円につきましては、本日の取締役会で決議をいたしました。

セグメント別 売上高/営業利益

(単位：億円)

	セグメント*	2021年度	2022年度	差異 (B) - (A)	増減率
		(A)	(B)		
売上高	機能品	608	690	82	13.5%
	樹脂・化成品	2,600	3,400	800	30.7%
	機械	970	1,010	40	4.1%
	その他	542	730	188	34.6%
	調整額	1,832	△ 360	△ 2,192	-
	計	6,553	5,470	△ 1,083	△ 16.5%
営業利益	機能品	116	130	14	11.8%
	樹脂・化成品	235	125	△ 110	△ 46.8%
	機械	51	45	△ 6	△ 12.3%
	その他	35	30	△ 5	△ 15.4%
	調整額	2	△ 40	△ 42	-
	計	440	290	△ 150	△ 34.1%

*：2022年度より、セメント関連事業の持分法適用関連会社化に伴い、「化学」「建設資材」「機械」「その他」から「機能品」「樹脂・化成品」「機械」「その他」の4区分とし、「医薬」は「その他」に含めています。それに伴い2021年度実績についても比較のため新しいセグメント区分に組み替えており、「建設資材」は「調整額」に含めています。

19

19 ページのスライド、セグメント別の売上高、営業利益の内訳でございます。

機能品につきましては、売上高、営業利益ともに前回予想から修正なしで、売上高 690 億円、営業利益 130 億円という予想でございます。

樹脂・化成品ですけれども、売上高は 40 億円ほど下方修正しまして 3,400 億円、営業利益は 30 億円ほど下方修正をして 125 億円としております。

機械でございますけれども、売上高は 30 億円ほど下方修正をして 1,010 億円、営業利益は、5 億円ほど下方修正の 45 億円です。

その他セグメントですけれども、売上高は 20 億円下方修正の 730 億円、営業利益は 5 億円ほど上方修正の 30 億円です。

調整額ですけれども、売上高は 10 億円ほど下方修正でのマイナス 360 億円、営業利益は特に前回見直しから変わらずというところでございます。

結果としまして、先ほどご覧いただきましたような売上高 100 億円の下方修正、5,470 億円。営業利益につきましては、30 億円の下方修正、290 億円という見直しでございます。

差異分析 全社

(単位：億円)



20

20 ページのスライドは全社の中のセグメント内訳でございますので、省略をさせていただきます。

差異分析 機能品

(単位：億円)



21

21 ページのスライドです。こちらは機能品セグメントに関してです。

こちらのページの資料は、少し見づらいと申しますか、左のグラフは対前年度の差異をとっております。右側のコメントは、前回の業績予想からの修正要素ということで記載をしております。

グラフをご覧くださいと、結果的に、機能品に関しましては 82 億円の増収、14 億円の増益を見込んでおるといこととでございます。先ほど申しましたように、製品別には増減等、動きはありますけれども、セグメントトータルとしましては前回の予想どおりにしております。

2022年度 連結業績予想

UBE / UBE株式会社

差異分析 樹脂・化成品

(単位：億円)



22

22 ページのスライド、樹脂・化成品セグメントになります。

対前年の差異をご覧くださいと、売上高は 800 億円の増収になるということで、内訳、サブセグメントをお示していますが、こちらパフォーマンスポリマー&ケミカルズのところが増収の大きな要因です。

それから、営業利益ですけれども、110 億円の減益を見込んでおります。内訳としましては、こちらパフォーマンスポリマー&ケミカルズの 97 億円減益が大きいところになります。

前回の業績予想からの修正点ですけれども、売上高につきましては、ナイロンポリマーやカプロラクタムといった辺りの販売数量減の影響があります。それから、コンポジットやファインケミカル等につきましては、為替レートの見直し等もありまして、上振れになっています。エラストマーはブタジエン等の原料の価格下振れを織り込みましたので、マイナスの要因になっております。

それから、営業利益ですけれども、下振れ要因としまして同じくナイロンポリマー、ラクタム等の販売数量減やスプレッドの縮小といったところを織り込んでございます。エラストマーにつきましては、スプレッドの改善等を織り込みまして、前回予想に比べますと上方修正となっております。

差異分析 機械

(単位：億円)



23

23 ページのスライド、機械のセグメントになります。

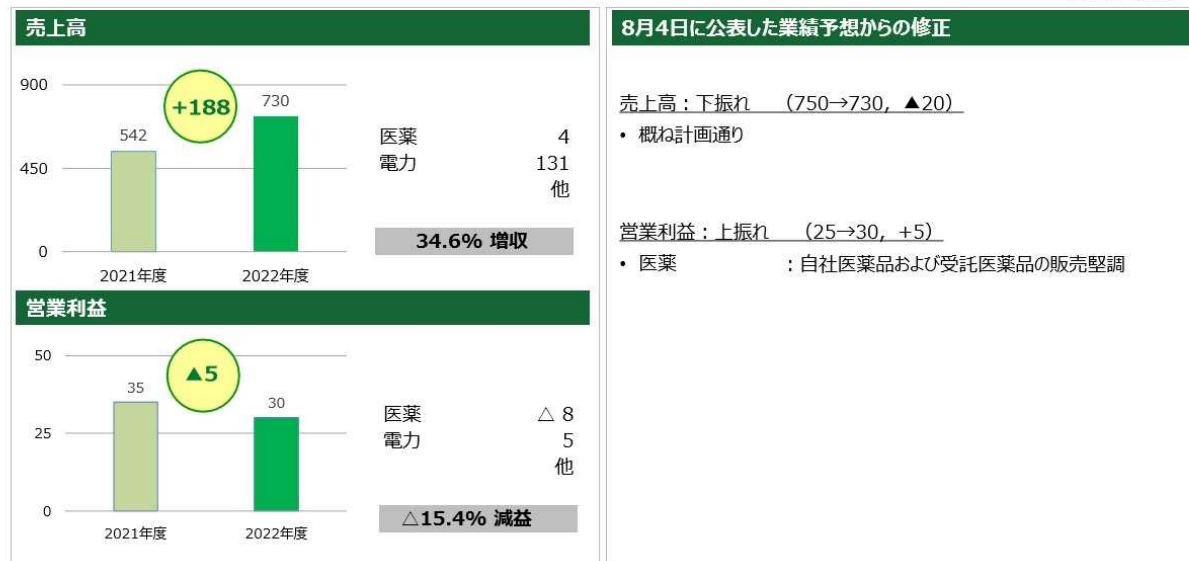
売上高は、40 億円の増収を見込んでおります。営業利益は 6 億円減益の見込みでございます。

前回予想からの修正でございますけれども、売上については、成形機に関して電気部品などの長納期化が進んでおります。そのため、納期等が後ろにずれるといった状況が発生しております。ただ、物流の混乱ということで、配線の手配等は遅れがちになるといったことも影響しますので、その分、売上の減少を織り込んだというところでございます。

それから、営業利益でございますけれども、製鋼事業の関係で、エネルギーコスト、電力コストの上昇を織り込んだというところでございます。

差異分析 その他

(単位：億円)



24

24 ページのスライド、その他セグメントになります。

売上高につきましては対前年度 188 億円増収の見通しで、主には電力です。

営業利益は 5 億円の減益を見込んでおりますけれども、こちらは医薬の関係での減益です。

前回予想からの修正ポイントですけれども、売上高につきましては特に大きな要因があってということではございません。

営業利益は少し上振れていますけれども、これは医薬の、自社品・受託品の販売が堅調ですし、あとライセンスの増加もございました。

営業利益～当期純利益

(単位：億円)

項目	2021年度 (A)	2022年度 (B)	差異 (B) - (A)
営業利益	440	290	△ 150
営業外損益	△ 25	△ 245	△ 220
うちUBE三菱セメント㈱に係る持分法投資損益		△ 245	
経常利益	415	45	△ 370
特別損益	△ 48	70	118
税金等調整前当期純利益	368	115	△ 253
法人税等・非支配株主利益	△ 123	△ 95	28
親会社株主に帰属する当期純利益	245	20	△ 225
1株当たり当期純利益	249.31円	20.63円	△ 228.68円

25

それから、続きまして 25 ページのスライド、営業利益以降に関してです。

営業利益 290 億円の見通しと申し上げました。営業外損益は、マイナスの 245 億円で、そのうち UBE 三菱セメントに係る持分法投資損益が 245 億円ございますので、もっぱらこちらの損失の取り込み分です。

前回予想から大きくここが下方修正と申しますか、悪化したわけでございますけれども、これは主として、同社の生産体制見直しに伴い特別損失を計上する見通しを織り込んでございます。それに加えて、当初打ち出した 2,200 円の値上げの獲得時期が多少、後ろにずれたこともございまして、そういった影響を含んでございます。

その結果、経常利益としてはさっきご覧いただきましたように 45 億円、それから、特別損益は前回予想どおりの 70 億円で、最終的に親会社株主に帰属する当期純利益 20 億円の見通しになったところでございます。

この後ろには参考資料としていくつか資料お示ししておりますので、またご覧いただければと思います。私からのご説明以上でございます。

司会：ありがとうございました。

質疑応答

司会：それでは、これから質疑応答に入ります。多くの方からのご質問にお答えするために、お一人様、1回につき2問まででよろしくお願いいたします。

では最初に、A証券のA様、ご質問をお願いします。

A：はい。A証券のAでございます。ご説明いただきましてありがとうございます。2問よろしくお願いたします。

1点目ですけれども、機能品は第1四半期でも予想を見直していませんので、期初から基本的に業績予想が変わっていないということだと思います。

上期は堅調に推移してきていますけれども、エンドマーケットで、ディスプレイ関係がかなり落ち込んでいるようにも見えます。また、情報家電製品も調整しているように見える中、期初の予想を確保できそうだと考えている背景、機能品の下期の見通しを変えない背景について、詳しくご説明いただければと思います。よろしくお願いいたします。

藤井：下期の機能品の状況ですが、先ほど少し触れましたが、製品ごとにプラス、マイナスが見込まれます。

まず、セパレータにつきましては、やはり自動車の減産影響等を受けておりますので、上期も低調に推移しましたし、下期に自動車関係は多少緩やかな回復傾向が続くとは思っておりますけれども、期初の想定に比べると、それほど大きな増加にはならないという見通しを立てております。

一方で、今ご指摘ありましたポリイミド関係ですが、COF関係における中国の液晶パネル関係の生産調整が継続している点については、上期もそういった影響をある程度は受けております。

ワニスについては、中国のスマホ市場の低迷や上海のロックダウンの影響等がございましたけれども、第2四半期の後半から需要は戻りつつあるというところでございます。

下期の見立てですが、スマホや液晶パネル等の調整は当面継続するとは思われますけれども、下期の後半ぐらいには回復していく見通しを織り込んでいます。それから、ワニスに関しましては、スマホ全体的な成長はありますけれども、スマホの中で、OLEDを採用するモデルが増えているということがございますので、そういった数量の伸びは見込めるというところでございます。

そういったところで、当初に比べると生産調整の影響等が入っておりますけれども、比較的、堅調に推移するという見通しでございます。

それから、当初の計画からの伸びの大きな要因として、分離膜がございます。こちらは、先ほど少しお話ししましたが、バイオメタン向けの脱炭酸膜の引き合い・受注が非常に好調を持続しております。

従来、分離膜の主力は窒素分離で、航空機、船舶、資源防爆用途といったところが大きかったですが、脱炭酸膜がこれを上回るほど伸びてきているところがございます。

下期につきましても、全般的にこの分離膜の需要は堅調に推移すると見ておりますし、特に、バイオメタン用途は欧米中心に旺盛な引き合いが継続する見通しでございますので、こういったところが先ほどのセパレータ等のマイナス等もカバーしながら、トータルとして機能品は計画線で進めているところがございます。

A：計画と大きく変わった点は分離膜の上振れであり、セパレータやCOFが若干弱くても、分離膜は限界利益率が高いため、ある程度取り返せる形になっているということでしょうか。

藤井：はい。あとセラミックスも今期かなり伸びておりまして、こちらは軸受とか基板用途といったところを中心に需要が堅調に推移しています。上期に原料のコストアップ等ございましたけれども、為替の円安効果等もございますが、価格転嫁を進めています。

電動化ですとか、環境関連の用途という側面が強いですから、自動車の減産影響はあまり感じずに順調に伸びてきており、下期も順調に継続すると見ておりますので、こういった分離膜ですとか、セラミックスといった辺りが多少、ほかで計画下回るものがあったとしてもカバーできているという状況でございます。

A：はい、よく分かりました。ありがとうございます。セラミックスは長期ですが、CMCにも期待しています。

2点目です。36ページにUBE三菱セメントの簡易的なデータをいただきまして、誠にありがとうございます。

持分法投資損益を倍にした際に、親会社株主に帰属する純利益からずれる要因として、連結調整がどのようなかたちで入っているのでしょうか。また、通期の経常利益は225億円で、純利益がマイナス495億円ですので、200億円の特損は今期および来期以降と発表されていましたが、計画上は今期にすべて計上される想定でしょうか。また、来期以降の100億円効果の確からしさについてご説明をお願いします。

藤井：持分法投資損益が対象会社の純利益の50%と必ずしも一致していない点についてです。前期の利益からのグループ会社の配当は、前期の株主である当社あるいは三菱マテリアル社に直接支払をしております。ただ、これを連結上で調整する必要がありますので、そういった調整等が入ってずれている部分がございます。

ですので、それぞれの親会社の金額は異なっておりますので、必ずしも当社が持分で取り込んだ数字と、三菱マテリアル社が取り込む数字がまったく一緒というわけではございません。

それから、経常利益から純利益で大きく損失が増えている点は、ご指摘のとおり、構造改革に伴う特別損失です。総額200億円程度という金額は現時点での概算見積もりでございますので、今後精査をしていくことにはなりますけれども、そのほとんどを今期に取り込む前提で組んでいる数字でございます。

その効果でございますけれども、青森工場の閉鎖や伊佐セメント工場の1号キルンに伴い、来年度以降、ざっと年間100億円程度の押し上げ効果を見込んでいます。これは9月に発表したときから見方としては特に変わっておりません。

A：特定の商流がなくなったり、固定費が下がったりすることによって、100億円の効果は高い蓋然性で達成できそうだという理解でよろしいでしょうか。

藤井：固定費等の削減部分、それから採算性の低いところを減らしていくなど、トータルとしてそういった効果が出るだろうと見込んでいるところでございます。

A：採算性低いところの改善によって、全体的に効率は上がるということでしょうか。

藤井：特に輸出関係はやはり採算が非常に劣るところもございますので、トータルの生産量の減少に伴い、構成を変えることができるところがございます。一方で、廃棄物の処理等については、廃棄物の受け入れを他の工場等に振り分けてキープする方向で、効果の最大化を図っていきたいと考えております。

A：はい。よく分かりました。ありがとうございます。

藤井：ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。次に、B証券、B様。ご質問をお願いいたします。

B：B証券のBと申します。それでは、2点よろしくをお願いいたします。

藤井：はい。お願いいたします。

B：1点目、セメントからお願いできればと思います。

36ページの右側に数量がございますが、輸出の数量を教えてください。また、国内の下期の値上げについて、どう価格を織り込んでいるのでしょうか。

藤井：上期のセメントクリンカーの輸出の実績は、219万トンです。これは前年同期比では10%弱ほど下回っております。

輸出の価格につきましては、採算性の低いスポット等を見合わせていることもございまして、前年を上回るような価格は確保できているというところでございます。下期についても同じような方針で対応していきます。

それから、国内の値上げの状況ですが、期初に打ち出しておりました2,200円の値上げにつきましては、この上期でほぼ完遂をしている状況でございますけれども、この辺りの交渉等が少し想定よりも後ろにずれたことがございます。今追加値上げの3,000円の値上げについて、鋭意交渉等を進めております。皆さんに一部ご理解はいただいているところで、一部獲得しつつあるところもございまして、早期の完遂を目指して、引き続き交渉を進めていきます。

B：先ほどの100億の改善効果は、営業利益や課税前利益での改善効果という理解でよろしかったでしょうか。

藤井：そういうことでございます。

(参考) 2022年度 第2四半期決算

UBE / UBE株式会社

営業利益 四半期比較

(単位：億円)

セグメント	2022年度 第1四半期 (A)	2022年度 第2四半期 (B)	差異 (B) - (A)	差異要因
機能品	28	27	△ 1	
樹脂・化成品	19	5	△ 14	パフォーマンスポリマー&ケミカルズ △ 35 エラストマー 21
機械	4	9	5	
その他	7	6	△ 1	電力 1 他
調整額	△ 14	△ 5	9	
計	44	42	△ 2	

B：2点目は、34ページの、樹脂・化成品、特にパフォーマンスポリマー&ケミカルズのQ1からQ2にかけての営業減益要因についてです。

Q1はアンモニアの定期修理があり、全般的に数量が抑え気味だったと思いますが、それでもQ2で利益水準的に下がった理由を教えてください。また、Q2に悪かったところを踏まえて、下期にはどの部分が改善するのか教えてください。

藤井：第1四半期から第2四半期にかけて悪化しているのは、もっぱらラクタムナイロンのところ です。硫安も含めてですけれども、やはりラクタムに関しましては、中国関係等で需要が盛り上がり、スプレッド等が悪化しているところがございます。

特に第2四半期は、市場環境が急速に悪化しました。欧州では、天然ガスの価格が高騰しており、価格転嫁できてスプレッドは確保できるけれども、全般的にインフレにより需要が鈍化して、販売数量が減少しているといったところがございます。

それから、中国関係では、需要は伸びておりませんし、川下のナイロンチップが供給過剰になっており、中国以外に輸出も出ている状況になっておりまして、これらがラクタムナイロンの需給の緩みやスプレッドの低下につながったというところです。

下期の見立てですけれども、ラクタムやナイロンポリマーにつきましても、あまり大きな改善は望めないのかなとは思っております。第4四半期辺りで緩やかな回復傾向に移行するぐらいかなという見立てです。ヨーロッパにつきましても、足元で天然ガスの価格も落ち着いてきており、今後どうなるかというのはありますけれども、足元では採算の改善方向にはなっております。

下期に改善する大きなところとしては、硫安がございます。上期にアジアでアンモニアの市況が高値維持する中で、硫安に関しては、中国の輸出品に引きずられて市況が悪化しておりました。

欧州でも価格転嫁したところ高値となって買い控えという流れになっておりましたが、足元では先ほど申しましたように、ヨーロッパも価格が落ち着きあるいは肥料の需要期に入ってきて、出荷も増えてきているというところもございます。国内の需要に関しましては、大粒品中心に堅調に推移しておりますし、価格是正も進められるところがございます。また、原料の硫黄価格が海外で軟化しているというところもございます。そういったところを織り込み、硫安は下期には回復してくると見ています。

あとは、コンポジットやファインケミカルも上期に定修影響を受けていたわけですが、下期はそういった制約もなくなり、拡販を進められます。

それから、価格転嫁が多少後追いになっていたところで、今価格転嫁が追いついてきているところもございますので、そういった流れで、下期にかけて利益は回復していけるのではないかと見ているところでございます。

B：はい。よく分かりました。どうもありがとうございました。

藤井：はい。ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。それでは、そろそろお時間近くになりましたので、次の方のご質問を最後とさせていただきます。それでは、C証券のC様、ご質問をお願いします。

C：C証券、Cです。二つお願いいたします。

1点目はナイロンについて、食品包装用途は海外で需要が弱いとのことですが、競合メーカーが安値販売して、積み上がっている在庫をさばこうといった動きは出てきているのでしょうか。

藤井：先ほど、少しラクタムナイロンのところで申しましたけれども、中国でナイロンが過剰になり、中国外に流出しています。これが欧州やアジアでの安値供給につながっています。需給が緩み、価格がなかなか上がらないといった状況になっております。

C：ありがとうございます。

もう一点、セラミックスの基板用途についてですが、これはいわゆるパワー半導体向けの放熱基板の用途で使われているということでしょうか。また、今後の見通しについても教えてください。

藤井：基板用途は放熱基板用途といったところ向けになるうかと思えます。足元では堅調に推移しており、今後も堅調な需要が見込まれるところです。

C：ありがとうございました。以上です。

藤井：はい、ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。終了予定の時間となりましたので、以上で質疑応答を終了させていただきます。

最後に、藤井常務、一言、ごあいさつをお願いいたします。

藤井：はい。ただいまご説明しましたように、今期の業績につきましては、数字の面で大変厳しい見通しとなっております。今後も原燃料価格の動向ですとか、世界的な経済情勢とか、懸念材料は非常に多い状況が続くとは思われますけれども、こうしたところの変化につきまして注意しなが

ら、やはり需要をしっかり取り込んでいくこと、それから価格税制、コストダウンを徹底していくこと。

そうは言っても将来の成長に向けた施策。これは着実に実施をしていくことに注力して、この下半期、過ごしてまいりたいと思っているところでございます。

本日は、ご参加いただきましてどうもありがとうございました。以上でございます。

司会：以上で電話会議を終了いたします。ご参加ありがとうございました。

[了]